

データで見る大相撲 続々篇
関脇を最高位とした力士を眺めてみる

昭和元年以降に関脇に昇進した力士の内、最高位が関脇だった力士は120人。
その内、在位期間が三場所以下の力士は77人(64%)、四場所以上の力士人は43人(36%)。
また一場所だけ関脇になったことがあるという力士は42人(35%)いる。
幕内力士全体の中で見れば、関脇まで辿り着けたということだけで、稀有で幸運なことであり、相撲界に入った人全体から見ればさらに稀少な存在と言うことになる。
この関脇を最高位とした120人の中で、在位が10場所以上の力士は12人しかいない。
関脇に在位した場所が最も長いのは、長谷川と琴錦の21場所。
長谷川・琴錦の次に続くのが若の里(17場所)、貴闘力(15場所)、大栄翔・羽黒山(14場所)。
この12人の中に入っている唯一の現役力士は大栄翔。怪我の影響で先月の名古屋場所を全休して陥落が決まってしまったが、今後の動向を注目したい。

表-1:関脇を最高位とした力士(在位場所順)

赤字=現役力士

在位場所	人数	名前	合計と割合	
21	2	琴錦・長谷川	12人 10%	
17	1	若の里		
15	1	貴闘力		
14	2	大栄翔・羽黒山(安念山)		
12	3	安芸乃島・琴ヶ梅・逆鉾		
11	1	栃煌山		
10	2	大豪・時津山		
9	1	荒勢		31人 26%
8	6	若隆景・玉鷲・逸ノ城・妙義龍・黒姫山・高見山		
7	8	若元春・土佐ノ海・寺尾・栃ノ和歌・出羽の花、麒麟児・天竜・錦洋		
6	3	安美錦・栃赤城・玉乃富士		
5	8	阿炎・隆ノ勝・豊ノ島・明歩谷・羽黒花・岩風・玉乃海・幡瀬川		
4	5	嘉風・水戸泉・神風・高登・沖ツ海		
3	15		77人 64%	
2	20			
1	42			

●長谷川は、私と同じ昭和19年(1944年)生まれ。炭礦夫だった父親の勤務地樺太で誕生。
昭和25年(1950年)に引き上げて北海道の空知に住んだ。昭和35年(1960年)3月に大相撲入りし、昭和40年(1965年)1月に新入幕、同年11月新小結と順調に昇進し、その先が期待された。
入幕後は一日も休まず、幕内連続出場1024日の記録を残した。新関脇は昭和44年(1969年)1月で、8場所連続して関脇の座にいた。それから約一年半後に再び関脇の座を手にし、昭和47年(197

2年)の3月場所では優勝。いよいよ飛躍の年かと思わせたが、それはならなかった。

関脇在位中に優勝を含めて三回10勝以上を上げているが、8勝7敗・9勝6敗が多い。左四つの安定した型を持っており、右上手からの鋭い投げも定評があった。三賞受賞回数は8回、栃ノ海・佐田の山・柏戸・北の富士・輪島から金星9個を得ており、上位力士には強かった。

関脇在位成績は、164勝151敗で、勝率 0.521。幕内在位69場所で、523勝502敗(勝率=0.510)、また入門以来の通算成績は、678勝577敗15休(勝率=0.540)だった。

●**琴錦**は、昭和43年(1968年)群馬県生まれ、柔道で実績を上げはじめていたところ、佐渡ヶ嶽親方(先代琴錦)に見出されて昭和59年(1984年)3月に初土俵を踏んだ。西幕下5枚目まで躍進したところで、琴松沢から師匠の現役時代の四股名をいただき琴錦に改名。平成元年(1989年)5月新入幕、平成2年(1990年)九州場所で関脇に昇進。

身長 177cmの小さな体ながら速攻の突き押しと、体を小さく丸めて相手の懐に飛びこみ両差しを果たす素早い、鋭い動きが光り、貴ノ花・若乃花・小錦など強豪が並ぶ中で健闘が続いた。

その後女性関係のこじれからマスコミに騒がれてしまい、謹慎処分を受けて平幕に陥落することになったが、平幕で優勝して復活を遂げた。平成10年(1998年)7月場所の貴ノ花戦で足を痛めて低迷が続いたが、同年九州場所で二度目の平幕優勝を成し遂げた。この後、小結までの復活は果たせたが再関脇はならなかった。平幕優勝2回もさることながら、技能相撲での大物食いが多く、金星8個という実績を残した。殊勲賞7回、敢闘賞3回、技能賞8回で三賞合計18回は安芸乃島に次ぐ記録。

●**若の里**は、相撲の老舗と言われる青森県弘前の出身。小学校三年生で地元の子供相撲に出場して優勝したのがきっかけで、相撲に関心を持ち始めた。早くから地元出身の隆の里に目をつけられており、声もかけられていた。中学校卒業前に鳴戸部屋に入門し、平成4年(1992年)3月初土俵。一日百番を越える猛稽古で鍛えられて、平成9年(1997年)11月新十両。翌年5月新入幕で10勝5敗の好成績を上げて敢闘賞。

平成10年(1998年)九州場所で若乃花(三代目)から初金星を得たのだが、左足首を骨折。ここから復帰して翌年夏場所では優勝争いにも加わり11勝4敗の好成績で技能賞。しかし平成11年(1999年)九州場所で、左膝半月板損傷と靭帯損傷で二場所連続全休して十両に陥落。十両で二場所連続優勝して再入幕し、11勝4敗で敢闘賞を得て小結に返り咲き。この後は、30場所中26場所三役の座にいて、その殆どが関脇という実績を残した。最後の関脇から平幕への陥落の後で何度目かの十両陥落を経験したが、ここでも十両優勝をして復帰を果たしている。度重なる怪我が禍して、もうひとつの飛躍が出来なかったことが惜しまれた力士だが、殊勲賞4回・敢闘賞4回・技能賞2回・金星2個(若乃花・朝青龍)という素晴らしい実績のほかに、十両優勝4回という珍しい実績もあげた。

●**貴闘力**は、福岡県出身で藤島部屋から初土俵を踏んだ。三賞を14回受賞しており、金星も9個という高い実績ではあったが、賭博・覚醒剤などに手を染めて相撲界を追われた。従ってここで相撲の出来栄を評価する意味はないので、ノーコメントとする。

●**羽黒山**は、昭和25年(1950年)初場所、本名の安念で初土俵。三段目の時に安念山と改名。新入幕は昭和29年(1954年)5月、20才だった。昭和32年(1957年)5月場所、新小結で13勝2敗の成績で初優勝し注目を浴びることになったが、その後は平幕・小結・関脇を往復することが多く、もう一段上には届かなかった。若羽黒・北の洋・時津山と並んで立浪四天王と言われた。

千代の山・栃錦・若乃花・朝潮から金星計10個という立派な成績を残したが、大勝ちがあれば大負けもあり成績の安定性には欠けた。

師匠(元羽黒山)の娘と結婚し、後に羽黒山を襲名し、引退後は立浪部屋の後継者となった。

●**大栄翔**は、小学生の頃から相撲をやっており、入間市の少年相撲クラブを経て埼玉栄高校相撲部

へ進み、卒業を間近にして追手風部屋に入門。平成24年(2012年)初場所に初土俵。十両通過に7場所要して、平成27年(2015年)9月に新入幕。数回十両陥落を経験しながらも少しずつ力を付けて、幕内に定着できるようになった。令和2年(2020年)初場所新小結に昇進、以降は小結・関脇・平幕の間を行ったり来たりしたが、平幕の下位に落ちることはなく、関脇に定着するようになった。立ち合いの力強い踏み込みと頭で当たった後の全力を結集した突き押しは威力がある。しかし、激しい突き押しの最中に足が爪先立つ癖がある。威力低下の元になるし、最大の荷重が僅かな底面積にかかることになり、怪我の元にもなる。千代大海・阿炎もこの悪癖があり、怪我をしている。突き押しを主力とする力士は怪我也多く波があると昔から言われているので、これからどんな相撲人生になるのか、興味深い心配でもある。現役力士なので、数値を取り上げてのコメントは差し控えることにする。

●**安芸乃島**は、初代貴ノ花が起こした藤島部屋に入門した。身長175cmと、力士としては小柄な体だが、正攻法の相撲と、強じんな足腰で、様々な技を繰り出す技能派力士だった。前禪を引いて頭をつける体勢になると、まわしをしっかりと握って離さず、しぶとさが増す力士で、恐がられた。

殊勲賞・敢闘賞・技能賞は合わせて19個、金星獲得数16個も含めて史上一位の記録。金星の内訳を見ると、大乃国・千代の富士・北勝海・旭富士・曙・武蔵丸で軒並み犠牲者になったという様相。

輝かしい実績が示すように、上位にはめっぽう強いが、下位に取りこぼしが目立ち、関脇から抜け出すことはできなかった。「平幕にいて上位キラーとして活躍する名力士」という呼称が相応しいかもしれない。上位力士を倒して、取り組み終了後にインタビューを受けると、自分の相撲の流れをきちんとわかりやすく説明できる「技能派で頭脳派」の研究熱心な力士だった。

●**琴ヶ梅**は、富山県出身、昭和38年(1963年)生まれの力士が若手として期待された時代の「サンパチ組」の一人だった。昭和59年(1984年)3月新十両、翌年3月に新入幕。アンコ型で立ち合いの力強いぶちかましと、叩かれても落ちにくいのが売り物だったが、糖尿病と怪我で稽古量が減るにつれて脆くなった。

昭和61年(1986年)3月新小結、二年余り関脇の座を守っていたが、その後振るわず十両と幕尻を往復するようになり、平成9年(1997年)夏場所で引退。特記すべき特徴が有るわけではなかったが、いつの間にか12場所も関脇を務めていたという感じの力士だった。

引退後はしばらく部屋で後進の指導をしていたが、協会を退職して相撲料理店の経営者になった。

●**逆鉾**は、きれいな両差しで有名だった鶴ヶ嶺(のちの井筒親方)の三人の息子の一人(次男)で、井筒三兄弟と言われた。(井筒三兄弟=逆鉾・鶴嶺山・寺尾)

左四つで、たまに両差しを見せることもあったが父親譲りのテクニックだった。また、両差しになった後でがぶり寄りが出来る力士で、相撲巧者と言われた時期もあった。殊勲賞5回・技能賞4回という実績は相撲巧者ならではのもので、隆の里・千代の富士・双羽黒から金星7個を得ている。

逆鉾は関脇在位12場所で、弟の寺尾の7場所、父である鶴ヶ嶺の2場所を上回っている。

●**枋煌山**は、高知県出身で、小学校2年生の時の地元の少年相撲クラブでの活動がスタートとなった。大阪の豪栄道とはこの時代からライバル関係にあり、平成17年(2005年)初場所に二人そろって初土俵を踏んだ。平成19年(2007年)3月場所、新入幕で11勝4敗の好成績を上げて敢闘賞。

両差し狙いの立ち合いで、両差しになれば強いが、両差しになれなかった時の対応力に甘さがあり、それが成績にも表われていた。

平成24年(2012年)夏場所、前頭4枚目で12勝3敗をあげたが、優勝決定戦で旭天鵬に敗れ、賜杯を手にはできなかった。正攻法の技能派の相撲で小結・関脇を何度も経験したが、関脇まで辿り着くと失速してしまうパターンが何度か繰り返されて、壁の突破はできなかった。

●**大豪**は、昭和30年代に活躍した力士だが、度々改名をした関係で、記憶が薄れている人が多い。

初土俵時は本名の杉山、のちに國風→杉山→三杉磯→杉山→若三杉を経て大豪となった。

香川県の丸亀高校で柔道部に籍を置いていたが、花籠親方(元大ノ海)の誘いを受けて二年で中退して入門した。昭和30年3月に初土俵。花籠部屋の全盛時代で、若乃花(初代)を筆頭に関取がずらりと並び部屋の中にも外にもライバルが沢山いた。昭和33年11月新入幕で10勝5敗をあげて注目を浴び、昭和35年(1960年)には14勝1敗で平幕優勝をし、翌場所小結を飛び越して関脇に昇進。関脇・小結・前頭上位を上下していたが、この間に殊勲賞2回・敢闘賞3回を受賞し、金星を8個得ている。左四つを得意の型として右上手投げをよく打っていたが、やや腰が高く脇が甘いのが欠点で、伸び悩んだ。かなりの酒好きだったようで、引退後46才の時に肝硬変で落命している。

●時津山は、相撲関係の資料では福島県出身としているものもあるが、実際は大正14年(1925年)東京荏原の生まれ。子どもの頃に両親が離婚して、さらに父親と死別したため孤児となり、親戚に育てられて各地を転々としたことが背景にあるらしい。大阪相撲の時津風のところで力士としてスタートしたが、親方の計らいにより立浪部屋に移り再スタートとなった。

幕下で全勝優勝をして昭和22年(1947年)6月新十両、昭和24年(1949年)5月新入幕。

小結と平幕を何度か往復している内に、昭和28年(1953年)5月に前頭6枚目で全勝優勝。

立浪四天王の一人に数えられて、大物食いで、三賞7回・金星8個の実績をあげたが、相手を振り回すような粗雑で乱暴な取り口が多く、人気はあったが安定した成績にはならなかった。

●まとめ

関脇を最高位とし、在位10場所以上だった力士を中心に、実績を調べて見た。

優勝や三賞の受賞実績は幕内に在籍していた時代の活躍度を示すものだが、金星は平幕でしか得られないので、小結・関脇としての実績の評価にはならない。

「関脇としての実績評価」の尺度として使えるのは、「在位場所数」・「在位中の成績(優勝・勝率)」ぐらいで、三賞受賞実績は平幕時代のものも含まれるので、参考情報と言ったところだろうか。

そんな切り口で眺めて見れば、何人が浮かび上がってくるような気もするが、それぞれの力士の相撲のスタイルを好きか嫌いかという個人的好みも影響してくるので、客観的な評価にはなりにくい。

そんな訳で、今回頭の中で描いていた設問「名関脇で終わった、と評価出来る力士は誰か」については答を出さずに締めくくることにした。

以上

表-2:関脇在位場所が長い力士の成績

(在位 10 場所以上の力士)

力士名 (*現役)	関脇実績			幕内実績					
	在位 場所	優 勝	上段:成績 下段:勝率	優 勝	殊勲賞	敢闘賞	技能賞	金 星	上段:幕内成績 下段:勝率
長谷川	21	1	164-151-0 0.521	1	3	3	2	9	523-502-0 0.510
琴錦	21		156-153-6 0.495	2	7	3	8	8	506-441-43 0.511
若の里	17		144-103-8 0.565		4	4	2	2	613-568-124 0.470
貴闘力	15		113-112-0 0.502	1	3	10	1	9	505-500-0 0.502
羽黒山 (安念山)	14		101-107-2 0.481	1	3	1		10	428-427-1-29 0.484
大栄翔*	14		109-84-17 0.519	1	5		2	2	442-381-17 0.526
安芸乃島	12		77-82-21 0.428		7	8	4	16	647-640-78 0.474
琴ヶ梅	12		94-86-0 0.522		1	4	2	2	369-389-22 0.473
逆鋒	12		90-90-0 0.500		5		4	7	392-447-16 0.458
栃煌山	11		83-75-7 0.503	1	2	2	2	6	573-563-19 0.496
大豪	10		70-80-0 0.467	1	2	3		8	387-374-4 0.506
時津山	10		79-71-0 0.527	1	3	4		8	359-336-40 0.488

●参照したデータ

大相撲.jp <https://xn--pss02y7wo.jp/rekidaiRikishi/2>日本相撲協会 <https://www.sumo.or.jp/Yokozuna/ozeki/>